

「この仕事を選んでよかった!」という瞬間が必ず訪れる仕事

将来先生を目指す人へ 養成現場からのメッセージ

子どもを支える仕事として真っ先に思い浮かぶのは、「学校の先生」でしょう。

かつて本誌No.21(08年5月発行)で教師の醍醐味、おもしろさを存分に語ってくださった京都橘大学 池田修先生に再登場をお願いし、これからの時代に向けて新たなメッセージをいただきました。

取材文／荒尾眞正(本誌編集デスク)

教材づくりはおもしろい!
マンガも十分に使えます

国語の学習ゲームやディベートのシナリオなど、私はこれまでにたくさん教材を作ってきました。それが教師という仕事の醍醐味のひとつだと思っていますが、そのおもしろさを伝えたくて、大学の教師志望の学生たちにも教材づくりの課題を出しています。

私の今年のゼミでは、マンガを使った漢字テキストづくりをテーマにする予定です。マンガにも漢字が使われていますが、それらをすべて抜き出して、学年初配当に並べ替えたら、立派な漢字テキストになるはずです。

マンガを読むことも勉強になる!

そんなふうにも子どもが思えたら、勉強嫌いの子ども少しは変わるのではないのでしょうか。これからの教師には、子ども文化を学校文化に取り入れるような手法を覚えてほしい。それってすごく楽しいし、子どももうれしいのです。私は授業を評価するポイントは4つあると思っています。

- ① おもしろかったか
- ② 受けた前後で良い変化があったか
- ③ 学んだことがどこかで役立つたか
- ④ その授業が人類の進歩に貢献したか

マンガなどを教材にしてうまく授業ができたなら、1、2はOKでしょう。3も

ぜひ目指したい。4については、「何をそんなに大それたことを」という人がいるのではないのでしょうか。でもこの視点はとても大切だと思っています。

「たかが50分の授業だから、そこそこいいや」ではなく、「この授業は人類をコンマミリでも良い方向に進められるだろうか」という思いをもって授業を準備し、授業に臨む。そんな学びを私もしていきたいし、これからの教師にも、ぜひそういう学びを目指してもらいたいですね。

運動会は「優勝!」ではなく
「生徒の成長!」を
目指したいですね

運動会や合唱コンクールの楽しかった思い出から、自分が教師になっても「学校行事に強いクラスを作りたい!」と考える教師志望者がいます。その気持ちはわかりますが、教師を目指すならば、違う見方もできたほうがいいと思います。

そういう学校行事も、実は教育活動の「種」です。「特別活動」というものに当たり、部活動などもここに含まれます。「社会で仲間と一緒に生きる力」をつけるのが特別活動だと考えてください。

だとすると、教師が「合唱コンクールで優勝!」という目標を立てるのは少し違うのです。表向きはそれでよいとしても、本当の目的としては、「合唱コンクールで子どもたちの人間的成

長」といった目標を立てるのが教師本来の役割だと思います。

人間的成長とはどういうことかという、例えば子どもたちが話し合い、最終的には多数決で、このクラスはAという曲を歌うと決めたとします。Aを賛成していた子たちはやる気に満ちあふれているでしょう。でもBを推していた子は、やる気が失せているかもしれない。そんなときにA派の子が、B派の子を思いやれるかどうか。

「Bを推していた子たちが、少しやる気がなくなっているみたいだけど、どう思う？」とA派の子たちに担任から声をかけてみます。すると、「でも、多数決で決まったんですから、しょうがないじゃないですか」という声が返ってくるかもしれません。

「それはそうだけど、多数決で決まったでも少数派の意見も大切にしたいほうがいいよね？ そんなことをどこかで聞いた覚えがないかな？」

「それはありますけど…」
「だったら、たとえばね、今回はAの曲に決まったわけだから、Bを推していた子には好きなパートを選んでもらうようにしたらどうかな？『お互いさま』という言葉もあるでしょ。わかるかな？」

そんなやりとりのなかから、大人へ

と成長するための何かを生徒につかんでもらうのも教師の仕事なのです。学校行事は、そんなふうにして生徒の成長を促す絶好の機会だと思います。

**「いじめ」をなくすには
「予防」が大切だと思います**

「いじめ」というのはとても難しい問題ですね。でも防げないことはありません。そのためには、まずは構造を理解する必要がありますね。

例えばここに、いじめられている子(A)、いじめている子(B)、それをまわりで見ている子たち(C)がいるとします。みなさんが先生だったら、誰を注意しますか？ Bさん、と答える人が多いのではないのでしょうか。しかし、正解はCさんたちです。なぜなら、Bさんがいじめることができるのは、まわりが黙っているからです。もし「そんなことしちやダメだよ」というオーラをまわりから感じたら、Bさんもなかなか手を出せません。だからCさんたちに、見て見ぬふりをしてはいけないと言わなければならぬのです。

これが基本的な対処のしかただと思いますが、そのうえで、「いじめ」の対策として重要なのは「予防」だと私は

考えています。

「いじめを見たら先生に報告してね」と生徒に言っておいても、なかなか言ってくる生徒はいません。それは「チクリ」であり、クラスメイトへの裏切りだと考えるから、教師には言えないのでしよう。だから私は、教師への告げ口は、決して「チクリ」などではないと伝えまします。それは「ヘルプ」なのです。クラスメイトが悪さをするのをやめさせたい、けれども直接は言いづらい、だから先生からやめさせてほしい…これは「チクリ」ではなく、「ヘルプを求める」という行為です。恥ずかしくもなんともないことで、特に子どもたちは、大人には大いにヘルプを求める権利があるのです。

このような私の考え方を必ず4月に生徒に伝えていました。教師がはっきりと自分のスタンスを示すほうが生徒もやりやすいのではないかと思います。

**叱ってばかりいても
結婚式に招いてもらえる
ありがたい仕事です**

職業には「経済的自立」「自己実現」「社会貢献」という3つの側面があり

ます。実は教師は、この3つのバランスがきわめて良い職業だといわれています。「経済的自立」という意味では比較的安定しているし、採用試験を受けて就くわけですから「自己実現」にもなっている。人様から感謝されることが多く、「社会貢献」をしている実感も得られます。命を救ってくれたお医者さんでも結婚式に招かれることはほとんどないと思いますが、毎日叱ってばかりいたような教師でもご招待いただける(笑)。こんな仕事って、なかなかないです。

ただしもちろん、勘違いをしてはいけません。心配なのは最近、「自己実現」というものを少しはき違えている若者が増えている感じがすることです。

教師を志望する動機として、「子どもと一緒に成長したいから」という人が結構います。仕事をした結果としてそうなったとしたら、それはとてもありがたいことでしょう。でも、それを面接で言ったらアウトです。だって、教師の役割は「子どもの成長」であって、「教師の成長」のために給料が支払われるわけではないのですから。

では、どんな言い方なら良いのかといえば、「私は生涯をかけて人類の安定した繁栄という目標を追いかけたいと

